

京都の真ん中で、京の町での日常生活を取り戻すリハビリを

京都大原記念病院グループ 回復期リハビリテーション病棟 京都近衛リハビリテーション病院

院長 児玉直俊



京都近衛リハビリテーション病院は、2018年に京都市左京区吉田近衛町にオープンした100床の回復期リハビリテーション病棟です。京都大原記念病院グループが40年以上蓄積してきた経験とノウハウに基づく新たな挑戦の拠点と言えるでしょう。2022年、院長に就任された児玉直俊先生にお話を伺いました。

—— こちらの病院は5年前に開院されたんですね。概要を教えてくださいいただけますか。

京都近衛リハビリテーション病院は、1981年に開設された京都大原記念病院の分院です。京都大原記念病院ではかなり早い時期からリハビリ医療に着目し、リハビリ医療・介護サービスを展開してきました。当院は100床すべてが回復期リハビリ病棟という単科の病院になります。

京都大学医学部附属病院の向い側という京都市中心部に位置し、急性期から回復期・生活期へステージが移る患者を早期段階から受け入れる拠点として、大学病院や日赤病院を始めとした京都市内の高度急性期病院と密に連携し、ご紹介いただいて、地域医療に貢献しています。

常勤医はリハビリテーション科指導医や専門医など併せて6名、日本リハビリテーション医学会の研修施設になっています。理学療法士46名、作業療法士22名、言語聴覚士11名で、365日、平均8・1単位/日のリハビリ治療を行っています。平均入院日数は87日くらいです。看護師が45名、その半数くらいは介護士がいます。回復期リハビリ病棟はかかりやすい。

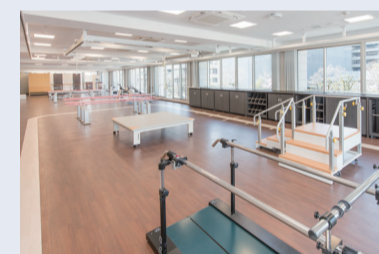
リハビリテーション科医師を中心に下肢装具作製や嚥下造影なども行い、天井走行型免荷リフト(身体を天井から吊るし体重を免荷した状態で立位や歩行訓練を行う)を使用している。歩行訓練や、和室やキッチンなどを備えたADL訓練ゾーンでの生活動作訓練など、在宅復帰・社会復帰を目指した専門的なりハビリ治療を提供しています。さらに京の町での日常生活を取

切だと考えて、厨房を委託から直営化して食事にバラエティを持たせたり、個室患者へコンシェルジュを配置するなど、新たな試みにも取り組んでいます。

病院内の
コミュニケーションを
復活させて、楽しい現場に

当院のような回復期や慢性期医療を担う病院は、直接コロナ患者受入れはできませんでしたが、後方支援病院として多大な影響がありました。収入面ばかりでなく、人的資源に対する影響、あらゆるコミュニケーションが絶たれたことは大きな問題となりました。職員は休憩時間の朝食やプライベートでの交流の制限などから、職員同士の関係性の構築が難しくなりました。

特に多職種連携を大切にしているリハビリ病棟では、チームアプローチの低下や情報共有の不足が、医療の質の低下や心理的安全性の確保の困難といった事態を招きました。また看護や療法士の学生が、臨床実習の制限を受けたことで医療現場へ馴染みにくくなったり、患者とのコミュニケーションが取りづらくなったり、メンタルヘルスを崩しやすくなっています。このため、心理



士を採用し、カウンセリングに当たってもらったりもしています。職場での良好なコミュニケーションは非常に重要で、特に医療介護は人と協働し人を相手にする仕事なので、コロナが一段落したこれからは職場の懇親会なども必要ではないかと考えています。休憩時間の雑談やサークル活動なども、病院という人の集まる場では非常に重要だということなんです。リモートの会議などは便利で良い点もあったのですが、カンファレンスなどは早く対面で行い、自然発生するコミュニケーションを大切にしていきたい。楽しく働ける現場が、患者に対する良いケアにつながっていくと思います。

「運動は万能薬、
安静は麻薬」

いい言葉だなと思っています。例えば心臓にとっても、適切に運動すれば心臓は安定します。最近では腎臓リハビリや肝臓リハビリなど、内臓のために運動をする、という考え方があります。良い運動をするところが身体のを良くするという、本当にその通りだと思えます。リハビリにとって安静が一番大敵です。とにかく起こそう、動かそうというのがリハビリです。

寝かしておいていいことは全くありません。例えば膝の手術をする前に、太腿の筋トレなどをしてもらうのですが、そうすると膝の痛みがなくなったりするんですね。脳も心臓も含めて、全ての臓器にとって、運動はいい効果があると実感しています。安静に慣れてしまふと、億劫になつて動かなくなりまふ。楽な方に流れてもいいことはありません。こういった考え方も「予防」と言えますね。

—— 「術前リハビリ」の必要性などにもつながりますね。



◆児玉直俊 プロフィール

2009年 順天堂大学医学部卒。初期臨床研修終了後、京都府立医科大学循環器内科学入局。京都市内の病院や大学病院で循環器臨床及び研究に従事。その後、同市内の回復期リハビリ病棟や京都府立医科大学リハビリテーション医学教室を経て
2018年 京都近衛リハビリテーション病院開院と共に院長補佐に就任
2022年10月 同院院長に就任、現在に至る

「盛時には驕らず、衰時には悲しまず」がモットー。
何事にも浮き沈みはあるが、常に物事を俯瞰的に捉え、かつ感情に揺さぶられることなく行動する。医療法人社団 行陵会 副理事長